

前尾記念文庫所蔵の近代政治家書簡群について

青 山 忠 正

は し が き

現在、京都府の宮津市立前尾記念文庫に、明治期を中心として大正・昭和初期に及ぶ著名政治家の書簡群原本、二二四通が所蔵されている。この記念文庫は、宮津市出身の政治家であった故前尾繁三郎氏（一九〇五年～一九八一年）の旧蔵書（三万数千冊）が、同氏が亡くなった（一九八一年七月）あと、遺族から市に寄贈され、一九八三年七月に開館して一般公開されているものである。前尾氏は一九四九年一月、衆議院議員に初当選以来、当選十二回に及び、衆議院議長を務めた（一九七三年五月～一九七六年十二月）ほどの政治家であるが、一方ではたいへん学者肌の人物であったと言われ、膨大な書籍資料を幅広

い分野にわたって所蔵していた。

この書簡群は、その前尾氏旧所蔵資料のなかに含まれていたものであるが、これまでに学術的な調査と整理がなされていなかったため、非公開であった。昨二〇〇〇年一〇月、宮津市から佛教大学に、その調査研究が委託され、佛教大学では研究会（会長は水谷幸正理事長・研究班長は青山）を組織して、解読と整理に当たっている。進行状況としては、二〇〇一年末現在で、一八一通（全体の八十一％）の解読を終えた段階であるが、以下は作業の中間報告として、これまでに明らかになった点、さらには今後の調査を進めるに当たったの手法などについて、私の個人的見解を簡単にまとめておくことにしたい。

一 伝来の経緯

まず、書簡群の伝来について見ておきたい。所有者という点から言えば、前尾記念文庫に寄贈される以前のそれは、当然ながら前尾氏である。では前尾氏が、いつどのような経緯で、この書簡群を入手したかについては、明らかな手がかりを今のところ発見できていない。断片的な史料や関係者の談話などを総合すると、昭和四十年代頃に、「横山章」という人物を斡旋者として、へまとまった状態で譲り受けたものと見られる。

そうすると当然ながら、だれから譲り受けたかが、次の疑問として生ずるが、この人物についても、直接の手がかりが全く見いだせない。とりあえず「未詳」の人物としておくが、これも明確な根拠はないもの、おそらくこの「未詳」の人物が、書簡を収集し、二三四通の書簡群として形成したものと推定される。

一般論であるが、書簡は通常、受信者（宛て先人物）家に伝来するものである。これから述べるように、この書簡群は、様々な人物が出した（様々な人物に宛てて）書簡の集積であるから、意図的に収集しない限り、まとまることはない。その収集者が「未詳」である以上、収集の具体的な過程についても、

現在のところ不明と言うほかないが、状況判断を踏まえた推察については、次節以降で触れることにしたい。

とりあえず分る限りのところを述べておけば、この書簡群は昭和十年代までに、現状の形で成立したものと考えられる。それというのも、昭和十七十八年頃、全二三四通が、一度活字化（書物として刊行）された形跡があるからである。

形跡とは、我ながらあいまいな表現だが、その写真復刻版（と見られる書物）が現に存在する。全日本新聞連盟編纂『維新書簡集』（昭和五十二年同連盟発行 B五判全四一五頁、昭和五十五年再刊）が、それである。しかし、その元版については、書名や刊行年月など検索に必要なデータが得られないため、実物を確認できずにいる。したがって、全日本新聞連盟版の内容から推測する以外に方法がないが、わずかながら手がかりが得られる。

たとえば写真版で収められている「帝室技藝員・帝國藝術院会員」橋本閑雪の題詩がそれで、その解題に「壬午八月有人来示此帳以索題詩余時為赴南方匆匆去筆書之」とある。この「壬午」は昭和十七年（一九四一）にあたるから、元版が昭和十七年八月以降に刊行された（少なくとも、その時点で刊行される状態にあった）ことが推察できよう。また、口絵として収録されている写真も、最も年次の新しいものが、「帝國、米英に

「宣戦を布告」という大見出しの昭和十六年十二月九日付「東京日々新聞」夕刊記事である。このほかに、本文の解説で使用されている文字が、旧（正）字体・旧仮名遣いであることなどから見て、この元版が昭和十七・十八年頃の刊行であろうことは動かせないと思う。

その内容は、現在の前尾記念文庫所蔵書簡群の内容そのものであり、各書簡の翻刻に簡単なエピソード風解説を付し、大部分の主要書簡については写真版を添えている。但し、年代確定はなされておらず、また翻刻にも誤読が目立つうえ、所蔵者を明記せず、さらに配列も現代の史料学的原則に沿っていない。昭和初期に多く出版される勤王志士遺墨集の類と、編纂タイプはほぼ同様であるが、まとまった収集書簡群として一冊にまとめて刊行されたことが特徴とは言えよう。

いずれにしても、全日本新聞連盟版にせよ、その未詳の元版にせよ、研究書に史料として引用されているケースは、現在のところ見当たらず、⁽¹⁾学界一般にも知られていないので、史料集としてみた場合、この書簡群の内容は事実上の新発見と考えて差し支えない。念を押すまでもないが、原本の所在という点に絞れば、文字通りの新発見である。

ただ『維新書簡集』所収書簡と現状の前尾書簡群を対照確認した場合、一点だけ明らかに異なる部分がある。すなわち、

『維新書簡集』（昭和五十二年版、二四二～二四三頁）には、西郷隆盛書簡（明治八年十一月十二日付、大山綱良宛て）が収録されているのに対し、前尾書簡群に西郷書簡は一通も含まれていない。その他の書簡はすべて対応する。したがって、一度形成された書簡群が、前尾氏に譲り渡される時点（あるいはそれ以前）で、西郷書簡一通のみが抜き取られたものと考えられる。むしろ、この西郷書簡の所在のみは、現在も不明である。

この点に関して、さらに付け加えておけば、『維新書簡集』では、全点数を二二四通と数えているが、武富時敏筆の憲政会本部あて演説草稿を収録するにもかかわらず、なぜか目次に掲げず、一通として数えていない（数えていれば実際には二二五通）。前尾書簡群では武富草稿を一通に数え（目録番外）、目録番号一～二二四のうち、九八番（差し出し・宛て名とも欠け。失われた西郷書簡）を欠番としている。そのため両者とも二二四通と、数量としては結果的に一致するのである。

二 内容と成り立ち

次に、以上の伝来の経緯を踏まえながら、収集の仕方との関わりを念頭に置きつつ、前尾書簡群の内容と成り立ちを見てゆくことにしたい。

(1) 発信者別及び受信者別の分類

まず、発信者別に人数を見ると、一三八名を数える。そのうちには、木戸孝允・大久保利通・伊藤博文・山縣有朋・勝海舟・井上馨・品川弥二郎・松方正義・桂太郎・原敬・福澤諭吉など、明治〜大正期にかけての首相・大臣級の著名政治家が多く含まれる。このうち三通以上あつて、一応のまとまりを持つのは、次の十二名八十通(全体の三五・七%)である。

伊藤博文八通・井上馨四通・桂太郎十六通・木戸孝允四通・西園寺公望六通・三條實美四通・品川弥二郎六通・橋本獨山四通・原敬十四通・松方正義三通・山縣有朋八通・山田顕義三通。

いっぽう受信者は、人数で一〇八名となる。このうちにも、西園寺公望・伊東巳代治・乃木希典など著名人を含むが、後に触れる豊永長吉など、大臣級と比べて知名度においてはるかに低い人物も含まれ、ばらつきが大きい。なお蛇足ながら、複数の人物から同じ一人の人物に宛てた書簡が多くあるため、発信者数より受信者数が、だいぶ少なくなる。

これらの点から考えると、収集者は書簡の筆者(発信者)に重点を置いて、著名人の筆蹟という観点から収集を行ったものと推測される。そのことは、愛蔵用のコレクションとして(歴史学研究上の史料としてではなく)収集したものと見る限り、

自然とも言え、一般に見られる傾向でもある。また、現在までの調査の段階では、写しや偽書と判断される文書は確認できず、すべてが真筆と見られる(確実な代筆一通、代筆と思われるもの一通あり⁽²⁾)から、収集段階で真贋鑑定などについても相応の吟味がなされたものであろう。

(2) 特定の発信者から特定の受信者あて分類

前尾書簡群は、以上からうかがえるように、収集段階ではあくまでも筆蹟コレクションという側面が強い。しかし、歴史学研究上の史料としてとらえた場合、一定の体系性を持つのは、ある人物からある人物宛ての、数量的にもまとまりを持つ書簡である。その意味からは、次の四種類が主要なものと言える。

- ① 原敬から西園寺公望宛て十三通、明治二十九年六月二十一日付け〜大正五年六月十二日付け
- ② 桂太郎から伊東巳代治宛て十二通、明治三十一年十二月二十八日付け〜明治三十年代前半
- ③ 伊藤博文から伊東巳代治宛て六通、明治二十五年七月三十一日付け〜明治三十年代
- ④ 山縣有朋から伊東巳代治宛て五通、明治十八年八月三日付け〜明治三十年代

右の整理から一見して明らかのように、伊東巳代治宛てが最も多い。伊東宛ては、右以外にも、井上馨・後藤新平各二通、西園寺公望・陸奥宗光・芳川顕正各一通があり、総計三十通（全体の十三・四％）にのぼる。ついで多いのが西園寺公望宛てで、総計十九通（八・五％）あり、この両者を合わせると四十九通（二一・九％）に達する。

宛て先人物としての西園寺については、断るまでもないと思うが、伊東巳代治（一八五七年五月七日～一九三四年二月十九日）は、明治と昭和前期の官僚・政治家であり、肥前長崎の出身だが、伊藤博文の知遇を受け、その直系として活動した。政治活動の期間は非常に長かったため、伊東宛あるいは伊東宛て書簡は極めて多いはずだが、史料伝存状態としては分散してしまっている。そのうちの一部にあたる三十通（明治二十～三十年代）が、この書簡群に含まれているわけである。

また、付け加えておくと、受信者として伊東・西園寺について多いのは、武富時敏であり、十五通（六・七％）ある。この武富宛て書簡は、発信者が絞られず、浜口雄幸の二通を除いて、若槻礼次郎など、すべて一通ずつだから十四人からの書簡である。この事実を、武富宛て書簡については、筆者に焦点を合わせた収集というより、武富関係文書として、武富家伝来の書簡を一定のまとまりのまま入手したという性格を示すように

思う。そのことが持つ意味については、武富の経歴と合わせ、次節で述べることにしたい。

三 書簡群としての性格

以上のように、現在の段階では、数量分析の面でも極めて限られた検討しかできていないが、それらを踏まえながら、推測を交えた状況的判断として、前尾書簡群の性格について、とりあえずのまとめを行なっておきたい。

結論から言えば、この書簡群は、収集の過程との関連から見ても、次の三群を核とし、その周辺に、体系的な伝存ルートから外れて流出した数十名分の書簡を集積したものであるように見える。

第一群は、明治期における長州閥著名政治家の書簡であり、伊東巳代治宛てが中心となる。先に見たように伊東宛ては三十通あるが、そのうち二十五通の筆者が伊藤・山縣・井上・桂といった長州閥の首相級である（井上は首相経験者ではない）。また、伊東巳代治宛て以外を含め、三通以上がある筆者十二名のうち、七名（四十九通）が長州閥である。著名政治家といっても薩摩閥は、松方正義ただ一人（三通）でしかない。

この点に関連して触れておきたいのは、受信者の豊永長吉で

ある。豊永は長門長府の人物で、幕末には印藤肇いんとうはらじと名乗り、山縣らとも、また坂本龍馬などとも交友があつた。⁽³⁾明治になつてからは下関の実業家として地元の有力者となるが、中央の政財界で名を成すようなことはなかつた。その豊永宛ての書簡が、浅野総一郎・児玉源太郎・野村靖・山縣有朋の各一通と品川弥二郎三通の総計七通収集されている。これは、収集者が山口県の地元と関係の深い人物であつたことを物語るのではなからうか。そうだとすれば、長州閥著名人の筆蹟に焦点を合わせて収集したことも、納得が行くと思われる。

第二群は、明治末〜大正初期における西園寺公望宛て書簡、総計十九通であり、原敬書簡十三通が中心をなす。西園寺関係書簡は数量は少ないが（西園寺の発した書簡は六通ある）、第一群とはやや性格が異なるものとして、収集ルートも別系統ではないかと思われる。ただ西園寺公望や原敬は、むしろ長州閥ではないが、両者は立憲政友会の総裁（第二代・第三代）として関係を持っているのであり、政友会がもともと伊藤博文を初代総裁として創立されたことを考えれば、あながち長州と無関係とは言えない。

第三群は、武富宛て十五通を中心とする大正五年（一九一六）前後の書簡である。武富時敏（一八五五年十二月九日〜一九三八年十二月二十二日）は、肥前佐賀出身の政党政治家で、

その経歴は曲折に富んでいるが、大正二年以降は立憲同志会に加入し、翌年第二次大隈重信内閣発足にあたり、通信大臣として入閣、次いで四年八月には大蔵大臣に転じた。さらに翌五年十月憲政会の成立にともない、総務に就任している。すなわち政党の系譜から言えば、政友会にとっては反対党の人脈であり、第二群の政友会系とは、政治的な意味での必然的なつながりは想定しにくい。したがって、書簡収集ルートにしても、第一群とも、また第二群とも別系統と見るべきであろう。

とりあえず、以上のように整理しておくが、第一群〜第三群にしても、当初の収集者は、それぞれ別々の人物であり、どこかの時点で三群が一つのコレクションに合体されたと考える方が、あるいは自然かもしれない。なお、このようなコレクションが、収集者または所蔵者にとつて、どのような価値を持つと認識されていたのかは、近代の歴史認識のあり方を考える上で、一つの検討課題たり得るだろうことを、最後に指摘しておきたい。

〈注〉

(1) 『勝海舟全集』別巻（講談社 一九九四年）は、明治十八年五月十九日付け勝海舟書簡（吉井友實宛て）を『維新書簡集』（昭和五二年）から引用している。

(2) 大正三年四月十七日付け高木正年書簡（武富時敏宛て）は高

木矢明後のため、明らかに代筆。明治十四年三月十一日付け岩倉具視書簡〔部長〕宛ては、筆蹟から判断して右筆による代筆と思われる。

(3) 京都大学附属図書館に、印藤肇宛て坂本龍馬書簡四通が所蔵されている。